多文化に生きるわたし

氏名：吉川　優（旧姓:檜山）　　学校名：　神戸市立桜の宮小学校
担当教科：全教科　　実践教科：総合的な学習の時間
時間数：5　　対象学年：　6 年　　人数：30 人

【実施概要】

【1】単元のテーマ・目標（評価の観点を意識して設定）：

自分が多文化の中で生きていることに気づき、文化が違う相手とも、共により良い社会を築くために大切なものは何か考えることができる。

【2】 単元の評価 規準例	（ア）知識・技能	日本と外国の文化の違いはもちろん、日本人同士の文化も異なることを理解している。
	（イ）思考・判断・表現	異なる文化の人同士でより良い社会を築くために大切にしたいことを考え、自分の言葉で伝えている。
	（ウ）主体的に学習に取り組む態度	外国籍の友達やクラスの友達のことについて、興味をもって考えようとしている。

【3】
単元設定の理由

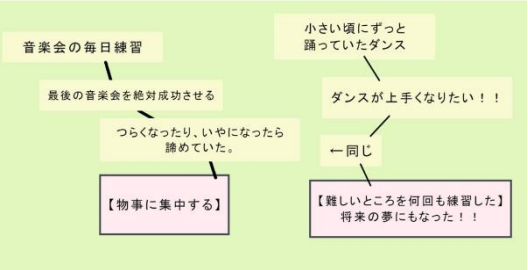
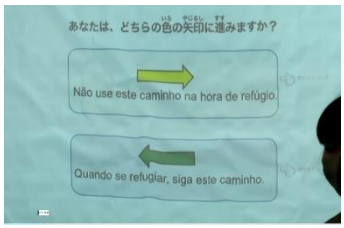
✓ 児童/生徒観
✓ 教材観
✓ 指導観
✓ 設定時に想定された児童の変容

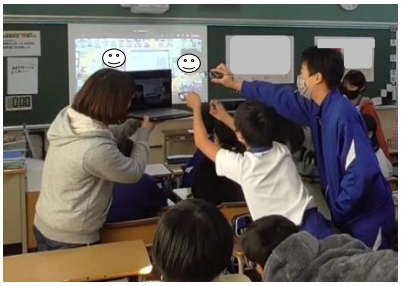
【単元設定の理由】
本校は、全校児童 160 人が通う小規模校であり、通常の学級はすべて単学級である。また、そのまま同じ中学校へ進級する校区であることから、転入生や私立受験生を除いて 9 年間をほとんど同じクラスメイトと過ごすことになる。また、普段外国籍の方と関わる機会がほとんどない地域でもある。そのような子供たちに対し、多文化社会の中で人とどう関わっていくべきなのか考えることを通して、自分たちの生活する社会にも異なる文化があふれていることを気づくようにしたい。

【児童観】
昨年に引き続き本学級の担任をしている。単学級で過ごしてきたこともあり、男女問わず仲が良い。ペアトークやグループワークはもちろん、全体での発表においても、積極的に意見を交わす姿が見られる。一方で、異なる意見や考えを受け入れることに抵抗がある子供も多い。今年度の全国学力学習状況等調査質問紙調査の結果では、「自分と意見の異なる人と話すのは楽しいと思いますか」との問いに対し、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と答えた子供の割合が 6 割に満たなかった。これは全国平均より 20 ポイント弱も低い結果であった。これは、同じ仲間と長い間過ごすことで互いを理解し、人間関係の深まりを感じる一方で、異質の考えなどに触れる機会に恵まれなかったのではないかと考える。そこで、今まであまり交流することのなかった他国籍の子供と交流する機会を設定し、文化も価値観も異なる子供との関わりを通して、「自分との違い」に触れ異文化を理解する経験を積ませたいと考えた。

	【教材観】 　この単元は、普段外国の方と関わることのない子供に、日本という外国で生活する多国籍の人と関わる機会となる教材である。その際、自分たちと同じ神戸市に住む同世代の相手である神戸市立義務教育学校港島学園の国際教室の友達と交流をすることで、相手をより身近に感じてほしい。そこで出会いの前に、港島学園の友達の立場を共感的に理解することをねらいとして震災体験ゲーム「何が起こった？」を実施する。この活動は、言葉が通じないことへの不安や生活で困ったことを体感するために行う。交流後の「オープン・ザ・〇〇」のワークショップは、互いの違いを明らかにすることにより、クラスの中にも多くの異なった文化があることに気付かせることができる活動である。 【指導観】 　今まで生きてきた 12 年間を振り返るところから学習を始める。自分たちが多種多様な関わりの中で生活していることや、その中で成長してきたことを思い起こすようにしたい。ここでは、先述した学力調査の結果を伝えることで、「自分と意見の異なる人」とのかかわりに課題があることを知らせたい。 　次に、自分たちが思っているよりも身近なところに多文化が存在することを実感できるようにするために、同じ神戸市内の小学校である港島学園国際教室の友達との交流を行う。震災体験ゲーム「何が起こった？」を通して、交流相手がどのような環境で過ごしているのかをイメージし、交流相手が感じてきたであろう、言葉が分からないことへの不安や生活で困ったことを体感できる機会としたい。オンライン交流では、お互いの国のことや日本で暮らしてきた経験を共有したり、一緒にできるアクティビティを取り入れたりして、他国籍の者同士でも楽しい時間を過ごす経験ができるようにしたい。 　子供たちが「自分と文化が異なる人」とも楽しく過ごせる体験をした上で、普段一緒に過ごしているクラスの中も、「小さな多文化」の一つとしてとらえ、各々の違いに気づかせたい。そのために「オープン・ザ・〇〇」では、いくつかの項目について自己開示を行う中で自分と相手の違いを明確化したい。さらにその中に１つ嘘を混ぜて、相手にどの項目が嘘なのかを考えさせることで、楽しみながら相手の内面を想像させていきたい。自分たちが過ごしているクラスでさえ、多くの「小さな文化」にあふれていることに気づき、異なる文化をもつことの良さと楽しく過ごしていくために大切なことは何かを考えることができるようにしたい。 【設定時に想定された児童の変容】 　外国籍の友達との関わりもほとんどなく、ずっと同じクラスメイトと過ごしてきた子供が、港島学園の友達との交流や自己開示の活動を通して、互いの文化の「違い」を肯定的にとらえ、受け入れて行こうとする姿勢を引き出していきたい。その中で見えてくるであろう様々な多文化の中で自分たちが生きていくことを実感してほしい。

【4】展開計画（全 5 時間）

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	生まれてからこれまでの12 年間を振り返り、自らが関わってきた社会の広がりを感じ、自分たちが得たもの、足りないものは何かを考えよう。	・生まれてからこれまでに関わってきた人々を思い起こし、自分が生活する世界がどのように広がってきたのかを考える。 ・6 年間の自分の成長を振り返る。 （文集制作と兼ねて実施）  ・学力調査の結果から、「異なる意見の友達と話すこと」に抵抗がある人が多いことに気づく。	SKYMENU 発表ノート 全国学力学習状況等調査質問紙調査結果
2	港島学園国際教室で学習する子供たちの存在を知り、交流計画を考えよう。	・港島学園の子供たちの母国について調べ、質問したいことを考える。 →地図上の場所はどこかな。 →どんな言葉を話すのかな。	タブレット端末
3	外国で生活することはどういうことかを考えよう。  	・言葉が分からない外国で被災する状況を仮定したワークショップを行う。 →避難経路はどちらだろう。 →避難所で支給される物資は、どれを選べばいいのだろう。 ・言葉や文字が分からないことから生じる不安な気持ち（＝港島学園の国際教室の子供たちが初めての日本の学校生活で感じたであろう気持ち）を体感する。 ・外国の友達が身近にいたときに、自分たちにできることを考える。	震災体験ゲーム 「何が起こった？」 （（公財）滋賀県国際協会）

4	多文化の中で生きる同世代の子供たちと出会い、異なる文化同士の人たちが交流する良さに気づこう。 	・港島学園国際教室の友達と交流し、世界に存在する多様な文化を知り自身を振り返るきっかけとする。 →お互いの自己紹介をする （桜の宮小学校の場所や、6 年 1 組の紹介） →事前に考えていた質問や、その場で新たに　出た質問に答えてもらう。 ①どうして日本へ来たのか ②日本の学校の好きなところ ③自分の国と日本の違うところ ④日本に良いところ 住みにくいところ ⑤自分の国の食べ物やイベントについて ⑥好きな日本語 →「あるものしりとり」をして遊ぶ。 ※教室にあるものだけを使って、お互いにカメラを通してそれらを見せ合いながらしりとりをする。 	国際教室の子供たちの母国の簡単な挨拶一覧 Teams チャット機能
5 本時	様々な角度から見た自分を互いに伝え合うことで、クラスの中も「小さな多文化」であることに気づこう。	「オープン・ザ・6 年 1 組！」 ・PowerPoint を用いて、自己開示する 4 つの項目を記入したカードを作成する。 （以下の 6 つから 4 つを選択する。） ①性格を一言で ②好きな〇〇、苦手な〇〇 ③わが家のこだわり ④今自分が大切にしていること	PowerPoint （以下　PPT）

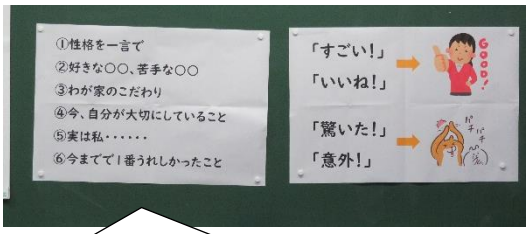
		⑤実は私…… ⑥今までで１番嬉しかったこと ※選んだ４つのうち、１つは嘘の内容を記入する。 ・作成したカードをグループで共有し、聴く側は相手の嘘を考える。 ・クラスの中にも様々な文化や価値観があることに気づき、異なる文化をもつ相手と関わるために大切なことを考える。	SKYMENU 発表ノート

【5】本時の展開

過程 時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (5 分)	１．港島学園の子供たちとの交流を振り返り、本時のねらいを確認する。	・国籍の異なる友達との交流を振り返り、次はクラスの友達と交流することを伝える。	
	クラスのみんなの文化を知ろう		
展開 (25 分)	２．「オープン・ザ・〇〇」を作成する。 ・複数の項目から４つを選び、配付する PPT に自分のことを書く。（１つだけ嘘の内容を入れる。）	・活動のイメージをもつことができるように、教師がデモンストレーションとして自己開示をする。 ①性格を一言で ②好きな〇〇、苦手な〇〇 ③わが家のこだわり ④今自分が大切にしていること ⑤実は私…… ⑥今までで１番嬉しかったことの６項目から４つを選ばせる。	参考：JICA 横浜 2019 年度教師海外研修実践授業レポート PPT 資料 「オープン・ザ・〇〇」中央に今の自分を表す写真を張り付け、周りに項目を記載。 アニメーションで項目ごとに見せられるようにしておく。
	３．カードを使って友達に自分のことを伝える。 ・グループごとにカードを使って、自分のことを伝える。 ・他グループの子供は聞いて、どれが嘘だったかを考える。 ・6 年間一緒に過ごしてきてもみんな違う文化を持っている。	・１項目ずつ見せながら、相手に自分のことを伝えるように促す。 ・聞く側は、「すごい」「いい」と思ったときは Good サイン、「驚いた」「意外だな」と思った時は、拍手で反応を示すように助言する。 ・より興味をもって相手のことを考えられるようにしたいので、嘘を混ぜることを助言する。	

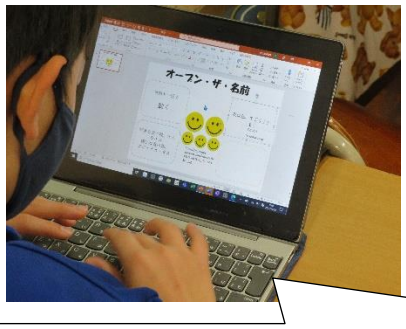
まとめ (15 分)	４．異なる文化をもつ相手と楽しく過ごすために大切なことを考える。	・SKYMENU 発表ノートに自分の考えを入力する。 ・入力した意見をグループごとに共有する。 ・グループの代表による全体共有を行うことで、より多様な視点を取り入れられるようにする。	SKYMENU 発表ノート

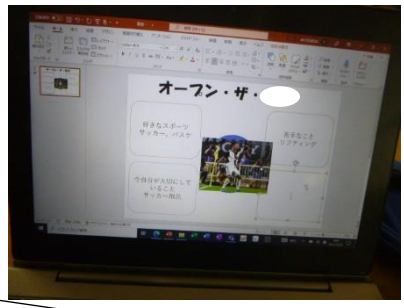
【授業実践の様子】（本時での写真を添付し、キャプションをつけて下さい）



カードに記載する項目の候補や、交流する時の反応の仕方について掲示した。

子供に具体的なイメージをもちやすくするために、教師がデモンストレーションを示した。



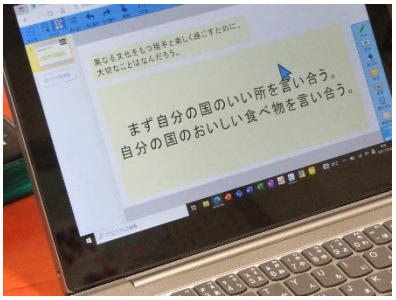


子供たちそれぞれに「オープン・ザ・〇〇」のカードを作成をした。指定された項目以外にも、真ん中に入れ込む画像や、カードのデザインにもそれぞれの個性が表れていて興味深かった。

班ごとの交流の時間。ハンドサインで反応を示すことで、相手がどう受け取ったかが分かりやすかった。

どの班においても、友達の発表を興味津々に聴いている姿が見受けられた。

まとめでは、単元全体を通して感じたことをSKYMENUの発表ノートにまとめさせた。子供それぞれが自分なりの言葉でまとめることができていた。時間が限られてしまいグループ内での共有が短い時間でしかできなかったのが残念であった。



【6】本時の振返り

「オープン・ザ・〇〇」の共有では、友達の意外な面を知れたという子供もいれば、予想通りだったという子供もおり、6 年間同じメンバーで過ごしてきてある程度互いのことを知っている子供たちにとっては少し物足りなかったかもしれない。自己開示する項目にもう少し工夫が必要だと感じた。また、反応をハンドサインで示すよう促したが、発表を食い入るように聞いたり、嘘の項目はどれかと必死に考えたりする中で、ハンドサインを忘れている子供も多く、型にはめるようでふさわしくなかったと感じた。相手の受け取り方を視覚的に示すためには、札を用意したり、色付きのシールを貼ったりといった方法の方が良かった。

全体的に時間が足りず、最後のまとめを共有する時間を満足に取れなかったことは、残念であった。単元全体を通して、異なる文化を知ったり、異なる文化の人と関わったりすることを、多くの子供が楽しいと感じて主体的に取り組んでいたことが大きな収穫であった。

【7】単元を通した児童の反応/変化

異なる文化をもつ相手と楽しく過ごすために、
大切なことはなんだろう。

相手のことを理解して素直に受け入れる。
相手の文化や違いを否定しない。

◎考えが変わったこと
＜気づいたこと、感じたこと＞
皆がみんな文化もいっしょだったり
普段の生活もいっしょじゃない
ということが改めて感じた。
外国人も黒人、白人みたいに差別するんじゃ
なくてみんなでたのしく過ごす。

異なる文化をもつ相手と楽しく過ごすために、
大切なことはなんだろう。

仲良くなるためにはおたがいの
きょうつうてんを見つけて仲良くなり、
お互い相手の意見などを否定せず、
受け止める事を心がけて楽しく過ごす
ことが大切だと思います!!!!!!!!!!!!!
たとえ、文化が違っていても
めっちゃ仲良く出来る事が分かった!!!!!!!!
反応などをするだけで相手が
笑顔になってくれるから日常生活
でもしたいと心掛けていきたいです。

Ⓠ：異なる文化を持つ相手と楽しく過ごすために、
大切なことはなんだろう。

互いの文化を理解して、その文化に沿って
話したり、遊んだり、多文化の人の事について
調べたりすれば、異なる文化の人たちとも
楽しく過ごせると思う!!
～＋α：この授業で考えが変わったこと、気づいたこと、感じたこと～
今回はゲームのような形で
仲のいい友達と話したりできたけど、
本当の時は、文化について説明することも
難しいことだろうし、文化を説明するということは
相手を知って楽しいこともあるけれど、
説明する側のことも考えながら聞かなければならないなぁと思いました!!

異なる文化をもつ相手と楽しく過ごすために、
大切なことはなんだろう。

相手の文化を知ろうとすることが大切だと
思います。
違う文化の人だから知らなくていいとか
関係ないとかそれは差別になるし相手の悪いところ
だけ出すんじゃなくて相手の文化のいいところを探すことで共感
できたり分かったりするところもあるかもしれないから大切だと思う。
また、困ってたりしたら会話が出来なくてもできることをすることも大切だと考えました。

気づいたことは、どの国でも通じることはあるということ。
□さんや□さんの国と日本の文化はちがうけど
日本もキルギスもパキスタンもいいところがたくさんある！！！

異なる文化をもつ相手と楽しく過ごすために、
大切なことはなんだろう。

人それぞれ違う文化を共有することで違う楽しみ方が
見えてくる。興味を持つことも大事だと思います。

気付いたコト
人は外見だけじゃないんだなあと思った事です。
自分をオープンするパワーポイントでは□さんの意外な
一面がありました。
いつもキリっとしていて面白い□さんでも
怖がりで心配性なのは初めて知りました
人は皆違うんだなと改めて思いました。

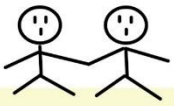
異なる文化をもつ相手と楽しく過ごすために、
大切なことはなんだろう。

自分の考え方を相手に押し付けずに、「この人はこう考える人なんだ」
と、人は人、自分は自分と考えれて、相手の考え方を受け入れられたら、
楽しく過ごせると思います。

考え方が変わったこと、気づいたこと、感じたこと

自分の意見ばかり押し付けて、相手の意見を受け入れられなかったら、
友だちもいなくなるし、協力してくれる人もいなくなるから、
自分の考え方も大切にしながら、相手の意見も取り入れて、
みんなが楽しく過ごせたらいいなと思いました

異なる文化をもつ相手と楽しく過ごすために、
大切なことはなんだろう。



そんなの気にせず普通に仲良くする

異なる文化をもつ相手と楽しく過ごすために、
大切なことはなんだろう。

自分が知らないことだからと
いって、「私は知らないから～」
「分からない～」とか思うのでは
なく、相手が好きと思っていることや楽しいと思っていることに
興味をもつことが大切だと思いました。

「考えたこと、気付いたこと」
前までは外国人の人は、日本語を話したりするのが難しいから大変と思っていたけど、震災体験や交流を通して、外国人って自分が思っているよりも、もっと大変で不安なんだろうなと改めて思いました

【単元を通し変容した児童の態度や学習意欲があれば記載下さい】
これまでも、互いの良さを認め合うことの大切さについては授業でも取り上げてきていたが、さらにその視野が国を超えて広がったように感じる。漠然とした「違い」を、互いの「文化」として認識することで、異なる文化は排除するものではなく、むしろ受容することを楽しんでいくものだと気づいた様子が、まとめの感想から多く見られた。日本人、外国人を問わず、相手に興味をもって積極的にかかわっていこうとする意欲が感じられた。
【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容について記載下さい】
（授業前）日本に暮らす外国人という存在は、ほとんどの子供が ALT しかかかわったことがなく、本校のＡＬＴは日本語も話せるため、特に不自由のない印象だったように感じる。そのため、言葉が異なる外国で暮らすことがどういうことなのかイメージできてい子供が多かった。また、同世代の外国人と関わった経験もほとんどなく、どう接したらいいのかよく分からない子供も多かった。
（授業後）港島学園の子供との交流や震災体験ゲームを通して、言葉や文化の違う国で生活することの大変さを知った。そこから、日本で暮らす外国人の方に対してその困り感に共感し、尊敬の念を抱く子供も多くいた。また、同世代の子供と交流することで、文化が違っていても一緒に楽しい時間を過ごすことができることを実感し、「また交流したい。」「外国人の友達が来たら、積極的に話しかけたい。」など、前向きに関わっていこうとする姿勢が見受けられた。

【8】自己評価

1. 苦労した点	異文化についての認識を、日本と外国という目に見えるものから、日本人同士という目に見えないところへ落とし込むことが難しかった。今回は外国人の子供との交流から、クラスの子供同士での交流に繋げたが、全く別個のものとして捉えてしまう子供もいた。 子供同士での交流において、既に互いをよく知る者同士だったため、意外な一面を捉えさせることが難しかった。単級という環境を踏まえた工夫が必要だった。
2. 改善点	今回は研修の中で紹介いただいた「震災体験ゲーム」を用いて、外国で暮らすとはどういうことなのかを体験させたが、次時に同世代の子供との交流が控えていたため、次回実施する際には日常の学校生活を題材にした体験ゲームを用いたい。 「オープン・ザ・〇〇」の活動における自己開示の項目は、学級の状況に応じて設定する必要がある。今回のように単級で実施する場合には、普段お互いが知ることのない項目や、学校生活では見られない項目をもっと増やしたい。
3. 成果が出た点	単なる「違い」だと否定的に感じやすいかもしれないが、それを「文化」と捉えることで、日本人同士の違いも肯定的に捉えられることに、子供の反応を通して気づいた。外国籍の子供と交流したり、自分たちの違いについてゲーム感覚で共有したりすることで、異なる文化を知ることや、異なる文化をもつ人と関わることを「楽しい」と感じられたことが一番の成果である。また、今回日本に住む外国人について考える中で、その苦労や努力を知り、その困り感に共感し、「尊敬」の念を抱く子供がいたことも嬉しい成果であった。

4. 備考（授業者による自由記述）	単級だからこそ、「これから生きる社会の広がりを感じさせる」「自分たちのまわりにある『多文化』を受容する心を育てる」ことを目的に取り組んできた。各過程の繋げ方には課題も残るが、単元全体を通して子供はこちらの想定以上に多文化との関わりを楽しんでくれた。今後も、今回の授業を改善しながら多文化理解の心を育てる実践を行っていきたい。

添付資料：震災体験ゲーム「何が起こった？」（滋賀県国際協会）、PPT 作成資料、SKYMENU 発表　ノート

参考資料：全国学力学習状況等調査質問紙調査結果、JICA 地球ひろば主催 国際理解/開発教育指導者研修 授業実践事例集、JICA 横浜　2019 年度教師海外研修実践授業レポート